様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年　6 月　7 日現在

機関番号：３２６５２
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2011～2012
課題番号：２３８３００７７
研究課題名（和文）　見知らぬ他者との関わりについての文化比較：社会ネットワークアプローチ
研究課題名（英文）　Cross-cultural comparison of social network and its effect on relationship with strangers

研究代表者
針原　素子（HARIHARA MOTOKO）
東京女子大学・現代教養学部・講師
研究者番号：８０６１５６６７

研究成果の概要（和文）：これまでの研究で、日本人がアメリカ人、韓国人と比べて、見知らぬ他者に肯定的態度を持たず、関わりを持たないことが示されている。本研究では、なぜこのような文化差が見られるのかについて、社会ネットワークの違いで説明できるかどうかを日韓米の比較調査で検討した。その結果、1)日本人がアメリカ人や韓国人と比べて、一般的信頼が低く、見知らぬ人との関わりが少ないこと、2)それらの日米差と日韓差は、部分的には、日本人のネットワークの小ささ、境界密度の低さで説明されること、3)境界密度の日米差は、部分的には、日本人の自己の状況依存性と、それによる別集団の知人同士を紹介しない傾向で説明できることが示された。

研究成果の概要（英文）：Previous research has shown that Japanese have less positive attitudes toward strangers and interact with them less frequently than Americans and Koreans. This study investigates whether such cultural differences in relationship with strangers can be explained by the differences in social network structure between Japanese and Americans/Koreans. Comparative online survey in Japan, the United States, and Korea revealed that 1) Japanese had lower general trust and fewer interactions with strangers than both of Americans and Koreans, 2) these cultural differences were partially mediated by the difference in network size and network boundary density (i.e. Japanese lower trust and fewer interaction can be explained by their smaller network and lower boundary density), 3) low boundary density among Japanese compared to Americans can be partially explained by their unwillingness to connect their friends who belong to different groups, because of their concerns about their different faces they show to their friends depending on their roles and relationships in each groups.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１１年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１２年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・社会心理学
キーワード：社会系心理学・比較文化・ネットワーク・一般的信頼

１．研究開始当初の背景

近年、日本人はアメリカ人と比べて、他者一般への一般的信頼が低いことが指摘され、日本社会の流動性の低さによって説明されてきた（山岸,1998 など）。一方で、典型的には閉鎖的な社会として知られる韓国で、人々の一般的信頼がアメリカ人よりも高いという謎も提起されている（Sato,2006）。行動レベルで見た場合も、日本人はアメリカ人と比較しても韓国人と比較しても、見知らぬ他者と相互作用を行わないことが明らかになっている（針原, 2010）。

人々のつながりの重要性を示す社会関係資本の文化差については、従来、個人主義的な文化のほうが、人々が見知らぬ人も含めた一般的他者をより信頼し、より多くのボランタリーな組織に属し、より多くの社会関係資本を持つとされてきた（e.g.,Allik & Realo, 2004; Hofstede, 2001）。これらの研究に仮定されているのは、近代化、都市化という歴史の流れにしたがって、人々が家族や親族、近隣といった社会的しがらみから自由になり、異質な人々からなる多くのボランタリーな組織を形作るようになり、一般的他者への信頼など、他者への肯定的態度を持つようになる、という一連のプロセスである。しかし、前述の、日本人がアメリカ人と比較した場合のみならず、韓国人と比較しても一般的信頼が低く、他者との関わりが少ないという文化差は、この理論では説明することが難しい。

２．研究の目的

そこで本研究では、なぜ日本人は見知らぬ他者も含めた一般的他者に肯定的態度を持たず、関わりを持とうとしないのかという問いについて、人々のつながりである社会ネットワークの特徴による説明を試みた。

仮説の１つめとして、日本人のネットワークサイズが小さいため、限られた個別のつきあいの中で、他者一般に対する肯定的な態度を持てないという可能性が考えられる。さらに、２つめの仮説として、日本人のネットワークは、家族、友人集団、職場集団などの各領域が孤立し、領域間のつながりが少ない境界密度（boundary density）の低い構造になっているため、ネットワーク他者への肯定的態度が領域固有のものとなり、その他の人々への肯定的態度に汎化しにくいのではないか、ということが考えられる。

本研究では、日韓米の比較調査によってこれらの仮説について検討することを目的とした。

３．研究の方法

日本、アメリカ、韓国の３ヵ国において、一般成人を対象としたインターネット調査を行った。質問項目の翻訳にあたっては、バックトランスレーションを行い、全ての言語において同じ意味を持つように留意した。

(1)調査対象者

それぞれの国において、都市部とその周辺の郊外や村落部が含まれるよう調査地点を選定し（東京周辺、ソウル周辺、ニューヨーク周辺）、25～59 歳の男女を対象に調査を行った。有効回答数は、日本 678 名、アメリカ 600 名、韓国 400 名であった。

(2)調査項目

①一般的他者への態度:

一般的他者への態度として、主に、一般的信頼、見知らぬ他者への働きかけの２つの変数を用いた。

『一般的信頼』は、山岸（1998）の一般的信頼尺度より 4 項目を用い、その平均値を得点とした。

『見知らぬ他者への働きかけ』については、「電車やバスに乗り合わせた見知らぬ人とでも、気軽に会話をする」など 4 項目の平均値を用いた。

②ネットワーク指標:

回答者のネットワークについて、家族、友人など５つの領域を挙げ、それぞれについて最もよく話をしたり親しいと感じたりする順に名前やニックネームを挙げてもらった。家族は最大５人まで、親戚は最大３人まで、仕事上のつきあいは最大３人まで、友人は最大３人まで、近所づきあいは最大３人まで挙げてもらった。ここで挙がった全ての領域の人数の合計を『ネットワークサイズ』とした。すべての領域で上限まで名前を挙げた人の最大ネットワークサイズは 17 人となる。

さらに、それら５つの領域（家族、親戚、仕事、友人、近隣）の１番最初に名前の挙がった人同士のすべての組み合わせについて、順に１つずつ提示し、その２人の間につきあいがあるかどうかを尋ねた。そこで、「つきあいがある」または、「知り合いである」と回答した組み合わせ数を、可能な組み合わせ数で割ったものを『境界密度』の指標とした。

４．研究成果

(1)一般的他者への態度の平均値比較

一般的他者への態度に関する２つの変数について、単純に日韓米の平均値を比較する

と、一般的信頼は、日本＜韓国＜アメリカの順に高くなり、同様に、見知らぬ他者への働きかけも、日本＜韓国＜アメリカの順に高くなった（図１）。日本人の一般的信頼と見知らぬ他者への働きかけが、アメリカ人、韓国人と比べて低いという結果は予測通りであった。

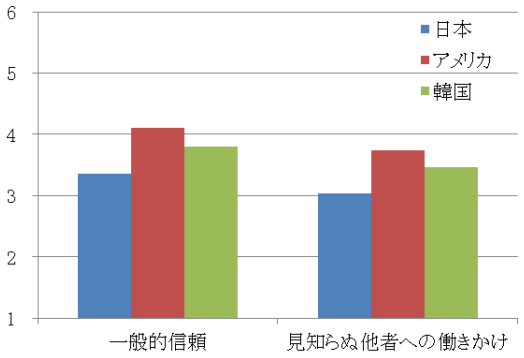

図１：国別の一般的他者の態度平均値

(2)ネットワーク構造の違い

①ネットワークサイズの比較:

次に、ネットワークサイズの平均値について比較すると、日本（7.44 人）のネットワークが、アメリカ（9.83 人）、韓国（9.19 人）よりも小さいという予測通りの結果となった（アメリカと韓国の間は有意差なし）。家族、友人などの領域別のネットワークサイズをまとめたのが図２である。日本人は、どの領域に関しても概して人数が少ないことが分かる。

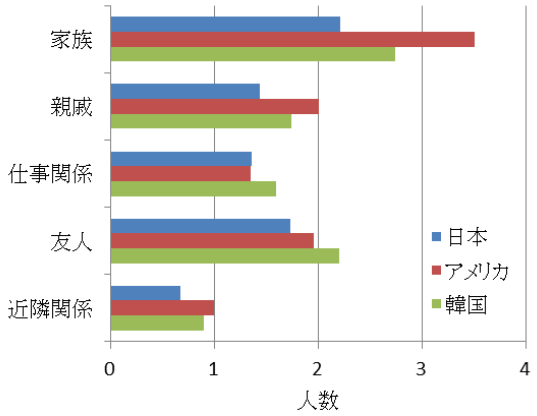

図２：国別、領域別のネットワークサイズ

②境界密度の比較:

次に、境界密度の平均値について比較すると、日本では 0.44（家族と親戚、家族と友人など、すべての組み合わせの内、平均 44%が知り合い同士）となり、日本（0.44）＜韓国（0.50）＜アメリカ（0.56）の順に高くなった。日本人のネットワーク境界密度が、韓国人と比べてもアメリカ人と比べても低いというのは予測通りであった。ちなみに、すべての領域の組み合わせごとに、何%の人が知り合いと答えたかを示したのが図３である。日本では、家族と近隣関係は知り合い同士であると答える人が多かったが、それ以外の組み合わせでは、軒並み低い知人率となっている。

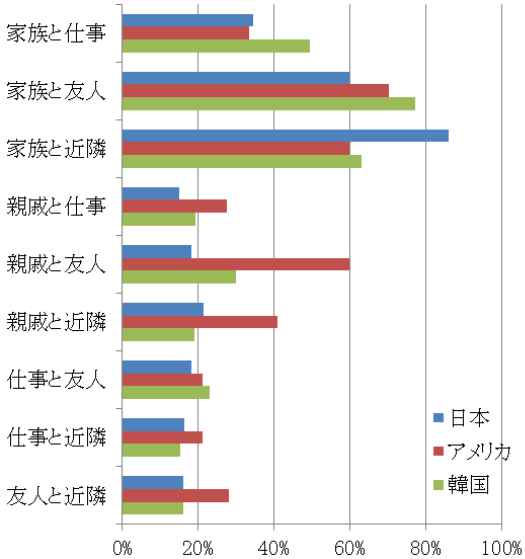

図３：国別、領域の組み合わせ別の知人率

(3)ネットワーク構造の一般的他者への態度への影響

ここまでの結果から、一般的信頼、見知らぬ他者への働きかけは、日本が最も低く、ネットワークサイズも日本が最も小さく、境界密度も日本が最も低いことが分かった。そこで、次に、仮説通り、一般的他者への態度がネットワーク構造の影響を受けているのかどうかを検討した。一般的信頼、見知らぬ他者への働きかけを被説明変数にして重回帰分析を行なった結果が表１である。

一般的信頼に対しても、見知らぬ他者への働きかけに対しても、ネットワークサイズと境界密度が共に正の効果を持っていることが分かる。さらに、それらのネットワーク指数を投入しない時（左列の結果）のアメリカダミー、韓国ダミーの効果が、ネットワーク指数を投入した時（右列の結果）には、少し小さくなっている。

表１：一般的他者への態度に対するネットワーク指標の効果

説明変数	一般的信頼 β	一般的信頼 β	見知らぬ他者への働きかけ β	見知らぬ他者への働きかけ β
ネットワークサイズ	—	.08 **	—	.11 ***
境界密度	—	.10 ***	—	.11 ***
性別	.00	-.02	.02	.02
年齢	.13 ***	.16 ***	.15 ***	.16 ***
学歴	.10 ***	.10 ***	.00	.02
収入	.09 **	.07 *	.09 **	.06 *
現在地居住年数	-.05 †	-.06 *	-.04 †	-.02
都市(1)村落(0)ダミー	-.02	-.01	-.01	-.01
アメリカダミー	.31 ***	.26 ***	.34 ***	.28 ***
韓国ダミー	.16 ***	.13 ***	.18 ***	.16 ***
R^2	.151 ***	.160 ***	.140 ***	.159 ***
Adjusted R^2	.147	.154	.136	.153

† p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.001
参照カテゴリは日本

そこで、一般的信頼、見知らぬ他者への働きかけの文化差の一部を、ネットワークサイズ、境界密度のそれぞれが媒介しているかどうかを検討した。その結果、一般的信頼の日米差について、ネットワークサイズと境界密度のそれぞれが媒介し(Sobel's Test z=2.37, p<.05; z=2.56, p<.05)、一般的信頼の日韓差についても、ネットワークサイズと境界密度のそれぞれが媒介していた(Sobel's Test z=2.70, p<.01; z=1.96, p<.05)。また、見知らぬ他者への働きかけの日米差について、ネットワークサイズと境界密度のそれぞれが媒介し(Sobel's Test z=3.27, p<.001; z=3.34, p<.001)、見知らぬ他者への働きかけの日韓差について、ネットワークサイズと境界密度のそれぞれが媒介していた(Sobel's Test z=3.49, p<.001; z=2.16, p<.05)。

ただし、ネットワークサイズと境界密度を説明変数に入れてもなお、アメリカダミーと韓国ダミーの効果は消えないため、一般的信頼、見知らぬ他者への働きかけの文化差の内、これらネットワーク指標の違いで説明される部分はごく一部にすぎないことが分かった。

(4)境界密度の文化差をもたらす要因の検討

①紹介しないからつながらないのか:

それでは、なぜ日本ではネットワークの境界密度が低いのだろうか。１つの仮説として、日本人は、自分の知人同士を紹介しないため、境界密度が低くなっているという可能性を検討した。

日本人が知人同士を紹介するのをためらうのは、その知人同士が異なる集団に属しているときであると考えられる。そのため、「友人のＡさんと歩いているとき、別グループの友人のＢさんが歩いてきた場合、どうするか」について回答してもらった。その回答から、「２人を紹介し３人で会話しようとする」とした人を３点、「２人を紹介するが、Ｂさんと少し会話をして切り上げる」とした人を２点、「２人を紹介せず、Ｂさんと少し会話をして切り上げる」とした人を１点とする『別集団紹介傾向』尺度を作成した。

その別集団紹介傾向が境界密度を説明するかどうかを検討した結果が表２左列である。境界密度は、知人同士を紹介するかどうかに関わらず、物理的に、ネットワーク他者同士が遠くに住んでいる場合には低くなると考えられるため、家族との同居、家族以外のネットワーク他者との平均的地理的距離も同時に投入した。ここから、別集団を紹介する傾向にある人ほど、境界密度が高くなっていることが分かった（β=.15, p<.001)。

そこで、この別集団紹介傾向が、境界密度の文化差を媒介するかを検討した。その結果、境界密度の日米差については、別集団紹介傾向が媒介するが(Sobel's Test z=4.85, p<.001)、境界密度の日韓差については、媒介しないことが分かった(z=1.43, *n.s.*)。ここから、日本人のネットワーク境界密度がアメリカ人のそれよりも低いのは、部分的には、日本人が別集団の知人同士を紹介しないからだと言えるが、日本人の境界密度が韓国人のそれよりも低いのは、それでは説明できないと考えることができる。

表２：境界密度に影響を与える要因の検討

説明変数	境界密度 β	別集団紹介傾向 β
自己の状況依存性	—	-.06 *
別集団紹介傾向	.15 ***	—
家族と同居	.09 **	—
ネットワーク他者地理的距離	-.17 ***	—
性別	.04	.01
年齢	.00	.07 **
学歴	-.10 **	.01
収入	-.05	.04
現在地居住年数	.02	-.03
都市(1)村落(0)ダミー	-.02	-.01
アメリカダミー	.21 ***	.26 ***
韓国ダミー	.12 ***	.01
R^2	.130 ***	.088 ***
Adjusted R^2	.122	.082

† p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.001
参照カテゴリは日本

②なぜ紹介しないのか:

それでは、なぜ日本人はアメリカ人に比べて、別集団の知人同士を紹介しないのだろうか。１つには、日本人は所属集団ごとに他者に見せる側面が異なっており、そのため、知

人同士を紹介するのにためらいがあるという可能性が考えられる。

そこで、「役割によって異なる顔を使い分けている」「相手によって自分をどう見せたいかが違う」など４項目の平均値から『自己の状況依存性』尺度を作成し、それが別集団紹介傾向を説明するかを検討した（表２右列）。その結果、状況によって自己が変わる傾向にある人ほど、別集団の知人同士を紹介しないことが分かった（β=-.06, p<.05）。

そこで、この自己の状況依存性が別集団紹介傾向の日米差を媒介するかどうか検討したところ、紹介傾向の日米差の一部を自己の状況依存性が媒介することが分かった（Sobel's Test z=2.16, p<.05）。ここから、日本人がアメリカ人よりも別集団の知人同士を紹介しないのは、部分的には、それぞれの集団に見せている自己の側面が異なるからだと解釈できる。

(5)まとめ

これらの結果から、日本人がアメリカ人や韓国人と比べて、他者一般への一般的信頼が低く、見知らぬ人との関わりが少ないのは、部分的には、日本人のネットワークが小さく、家族、職場、友人関係といった領域ごとに個別のネットワークを築いているため（境界密度が低いため）、他者一般に対して肯定的な態度を持つことができないからだ、ということができるであろう。ただし、一般的他者への態度の文化差には、それらネットワーク指標で説明されない部分も多いため、何がそのような違いをもたらしているのか、今後の検討が必要である。

また、日本人のネットワークの境界密度の低さについては、アメリカとの違いについてのみ部分的な説明要因が見つかった。すなわち、日本人は、アメリカ人と比べて、状況や相手によって見せる自分が異なっており、そのため、別集団に所属する知人同士を紹介せず、その結果として境界密度が低くなっているというものである。ただし、この結果についても、やはりこれらの要因で説明しきれない境界密度の日米差が大きく、また、韓国との違いに関してはこれらの説明要因では解釈できなかった。この点も今後の検討が必要な点である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計２件）

① Harihara Motoko, *The meaning of generalized trust: Comparative study in Japan and Korea*. The 13th annual meeting of the Society for Personality and Social Psychology, 2012 年 1 月 28 日, San Diego, California, U.S.

②針原素子、一般的他者への態度に及ぼす社会的ネットワークの影響、日本社会心理学会第 53 回大会、2012 年 11 月 18 日、つくば国際会議場

６．研究組織
(1)研究代表者
針原　素子（HARIHARA MOTOKO）
東京女子大学・現代教養学部・講師
研究者番号：８０６１５６６７

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし